

近代の克服 エリアーデ宗教学の形成過程とその展開

著者	佐藤 慎太郎
号	22
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博第377号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59371

さ　　とう　　しん た ろ う
佐　　藤　　慎太郎

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 377 号
学位授与年月日	平成23年 3 月25日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期 3 年の課程) 人間科学専攻
学 位 論 文 題 目	近代の克服 —エリアーデ宗教学の形成過程とその展開—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 鈴 木 岩 弓 教 授 後 藤 敏 文 准教授 木 村 敏 明 准教授 山 田 仁 史

論 文 内 容 の 要 旨

目次

はじめに

第一章 宗教学におけるエリアーデ受容および批判

第一節 受容の過程

第二節 日本におけるエリアーデ受容の様相

第三節 エリアーデ宗教学に対する問題の所在

第二章 エリアーデにおけるルーマニア

第一節 ルーマニアにおけるエリアーデ

第二節 N. イヨネスクとエリアーデの師弟関係からみるロムニズム

第三節 「歴史の恐怖」と「宗教学者」エリアーデの誕生

第三章 エリアーデ宗教学における近代批判性

第一節 *homo religiosus* 観から示される人間の宗教性

第二節 存在の根拠としての「中心のシンボリズム」

第三節 「聖なるものの擬装」と近代の実存

第四節 「救済の学問」としての宗教学 ―「新しいヒューマニズム」の創造性―

第四章 《近代》の克服としてのエリアーデ宗教学

第一節 エリアーデの《近代》／エリアーデと《近代》

第二節 エリアーデ宗教学の再定位

おわりに

謝辞

註

参考・引用文献一覧

資料

本論文の主題と目的（「はじめに」より）

本論文は、第二次大戦後のヨーロッパ、アメリカで活躍したルーマニア出身の宗教学者ミルチャ・エリアーデ（Mircea Eliade 1907-1986）を研究対象とするものである。エリアーデの研究は20世紀における宗教学という学問の枠組み自体を強く牽引する役割を担ってきたことで広く知られており、そのためその理論やパースペクティブを研究すること自体が、宗教学における一つのジャンルとして確立されてきた。いわば宗教学の学的再考や理論的反省の格好の題材であった。

とはいえ近年北米の宗教学界を中心に、エリアーデの研究全体が強い批判の対象となっている。前世紀においてエリアーデは、宗教学の内外から広く受け容れられながらも、存命中から、その用いる概念や方法論がしばしば批判されてきた。しかしそれとは別に、「宗教」概念それ自体に対する批判の潮流にともなって、本質主義的な態度をとまうエリアーデ宗教学に潜在する政治性、イデオロギーをとがめる、R. T. マッカチオンのような論者も出てきた。宗教学の制度的・方法論的再検討という要請の強い北米を中心に、「エリアーデ批判」それ自体が主題化されるような事態が起こっているのである。

本論文では、それらの批判を踏まえながらも、エリアーデ宗教学がどのような意義を有してきたのかを積極的に問うことを主題とする。エリアーデの学問観や人間観、その文化的・社会的背景など関連させながら、いかなるパースペクティブからその学問的営為が執り行われていたのかを明らかにしようとするものである。その方法としては、宗教学という学問に、ここまで影響を与えてきた事実を重視し、その受容史にも注目することにしたい。またこれまでのエリアーデを対象とした研究は、前半生をルーマニアで費やしたということを留意しながらも仏語・英語で著された文献が主たる対象であった。1945年の亡命以前のルーマニア語文献資料や当地での研究の参照は、M. L. リケッツにより刊行された評伝をのぞけば、不十分であったと言わざるを得ない。そのため本研究は、ルーマニア時代の諸資料にあたることにより、これまでの研究との差異化を図るとともに学的形成の問題にも踏み込むものとなる。

さらに本研究におけるエリアーデ宗教学に対する基本的な態度としては、彼の学問的性格を広い意味での近代批判としてとらえるものである。すなわちエリアーデは社会の非聖化とそれにとまう近代における人間状況に対する不安を、進歩主義・客観主義・科学主義・歴史主義などといった近代的世界観の興隆とを密接に結びつけ、そのアンチテーゼとして人間の宗教性に信頼を置いた、と解するものである。しかしそれは、宗教の自律性の主張から近代的思想への再考をうながそうとする目的を強く自覚さ

れたものであったことを論証する。

同時に、宗教学における学問論としての意義を有する。そもそも宗教学とはいかなる学問なのか。近年宗教学では、「宗教」概念自体に対する批判にともない、半ば自明であったひとつの学問として統一性に対する疑問が提示された。すなわち宗教学の問い直しが迫られているといえる。このような問題を考えるときに、前世紀において宗教学を代表し、しばしば「二十世紀最大の宗教学者」との賛辞が送られるエリアーデが、学説史的な反省の上でひとつの鍵となる。ひとつの学問分野としての宗教学に対する批判はしばしば、宗教学それ自体と等号をなすものとしてのエリアーデに対する、同一視あるいは敵視としてあらわれる。宗教学を成り立たせてきた枠組みの一部はエリアーデに負うところが大きいのである。そこで本論文ではそのような問題を重視し、エリアーデによる個々の宗教理論に対する議論というよりは、より広い視点からエリアーデのその立場やパースペクティブに対して焦点をあてる。

第一章 宗教学におけるエリアーデ受容および批判

先行研究の整理を、受容史として描く。特にエリアーデの影響の強かった北米の宗教学界の反応を押さえながら、一つの対称軸としてその研究の輸入国としての日本の受容の在り方を描写する。そこから導き出される受容のあり方と、近年強く主張されている本質主義批判やエリアーデのルーマニア時代における親ファシズム的態度への批判などの様相から、エリアーデ宗教学が学界にどのような影響を与えてきたのか、そして今何が問題となっているのかを考察する。

ポストモダニズム思想の流入や諸概念の再検討という学界内の動きにあわせて、前世代の代表的な研究者であったエリアーデを否定的に批判しようとするものが多くなっている。一方でその動きに対して積極的にエリアーデを擁護してゆこうとする研究者も存在し、かつそれが大学制度や所属する学会などと深く結びついて、アカデミズム内部の力学による陣取り合戦の模様を呈しているかのようである。そのため、ややもすると、エリアーデを批判すること、また擁護すること、それ自体が目的化してしまうといういささか本末が転倒したかのような事態も引き起こしている。こうした事態に対して、そういった動向を促したものは何であったのかという視点は常に担保されなければならないだろう。それはこれらの論争が、単なるエリアーデ批判というコンテクストだけで理解されるべきではなく、宗教学が有してきた問題点を明らかにし、今後の課題を導き出す手がかりになると考えられるからである。

現在のエリアーデ宗教学を取り巻く状況はさまざまな批判、擁護の入り混じった状況ではある。エリアーデ存命中からも彼に対する批判はあったが、それら個々のものに対する反論はエリアーデ自身の口から語られることはほとんどなかった。しかし、批判されるような厳密に実証的な学問的手続きを犠牲にしてまでもエリアーデが求めたものをこそ、エリアーデにとってはむしろ主張されなければならないかったことのはずである。

そのことを踏まえた上で、エリアーデ宗教学は学会においては理論の正誤・可否というよりは、現状では学説史的な問題となっていることが確認される。その意味で彼が果たした役割、あるいは目指した宗教学をどのように評価するのかという点において、思想形成を踏まえたエリアーデという人物そのものの研究が重要である。そのため、批判するにせよ再評価するにせよ、彼が生まれ、思想的・学問的な形成期を過ごしたルーマニア時代の研究は、避けては通れないものとなっていることをあらためて確認する。

第二章 エリアーデにおけるルーマニア

本章ではルーマニア時代に民族主義的な思想潮流に身を置いていたことと、彼の宗教学が近代に対す

る批判的な視点を有することになったことが密接な関連があることを提示する。また、エリアーデをヨーロッパの辺境にあるルーマニアの地方的・民族主義的な社会活動家から、世界的な宗教学者へと展開させてゆく逆説はなにによって引き起こされたのかを問う。

エリアーデが、東欧のルーマニアを出自とすることはこれまでもよく知られてきた。しかし、そのルーマニア時代のエリアーデの業績や学的形成の問題について本格的に研究が始まるのは、1980年代を待たなければならなかった。そこにはルーマニア語という言語の壁、及び第二次大戦後のルーマニアが鎖國的な体制をとっていたことからくる資料的な問題があった。しかし近年では、ルーマニア国内における資料的な整理が進み、研究の対象としてむしろ不可避なものとなっている。

エリアーデが青年時代を送った当時のルーマニアは、二つの世界大戦の間期にあつて政治的にも社会的にも非常に不安定な時期であった。近代化・西欧化の推進とその反発からくる民族主義的な主張とが社会的な不安感を煽っていたのである。エリアーデは当時、師にあたる N. イヨネスクの影響から後にドイツのナチ党と接近するファシズム的な運動であるレジオナル運動と非常に強い関係を持っていたことが確認される。またエリアーデのキャリアにおいてこの時代、大学において正式な役職を獲得したことはなかった。そのようななかにあつて亡命以降の学問はいかに胎生していたのか、あるいは彼の宗教学の重要な概念の起源がどこにあるのかを探った。

また彼の民族主義的主張は戦後も、亡命したルーマニアの人々の民族的紐帯に向けて発し続けられていた。同時に学術上もルーマニア・フォークロアは、Cosmic Religion という概念を伴って注目すべき資料としての地位を有し続けたことにも注目し、エリアーデにおけるルーマニアの位置づけをみていく。

エリアーデのルーマニア時代と亡命時代の橋渡しをする学術的著作としては *Traité d'histoire des religions* と *Le mythe de l'éternel retour* が挙げられる。両者ともに1949年に出版され、戦時中より着想を持っていたことが当時の日記から確認できる。またこの両著の刊行をもって本格的なエリアーデのパリにてのキャリアが始まることも重要であり、その意味では宗教学者エリアーデのデビューを飾るものでもある。そこで後者において初出であり、晩年まで引き継がれた概念である「歴史の恐怖」に注目した。

エリアーデはそこで「近代人」の特徴として、歴史の一回起性・不可逆性を受け入れ、「時間の周期的な再生」などの観念と決別する歴史哲学を見出す。エリアーデは、非近代人は聖なるものとのかわりにおいてその出来事自体を撥無し正当化しえた、と説いている。しかし「近代人」は苦難をひとつの歴史的な出来事として処理しなければならず、かつその出来事の重みに耐えなければならないという事態が現れる。それこそがエリアーデが「歴史の恐怖」と呼んだものである。このように「歴史の恐怖」は、「近代人」の不安・苦悩の問題として摘出され、以降の学術的著作の方向性を指し示すものとなっている。

一方で、戦時中のエリアーデの日記の時系列を追っていくと、しばしば眼につく「歴史の恐怖」という言葉は、当初は明らかに、戦争によってもたらされたルーマニア民族とエリアーデ自身の不幸の問題であった。しかし亡命し、実際に上梓された著作において、その心構えを訴えかけたのは西洋近代社会の人々に対してであった。この転回こそがエリアーデをヨーロッパの辺境にあるルーマニアの地方的・民族主義的な社会活動家から、世界的な宗教学者へと展開させてゆく要因であるといえよう。ルーマニアにおける民族主義は多分に西欧・近代への反動であったのだが、かつてそのような思想潮流に身を置いていたことが、最初に述べたように彼の宗教学が、近代に対する批判的な視点を有することになったことと無関係ではない。むしろ亡命を契機とした積極的な転換がそこには看取できるのである。

従来の研究においては、エリアーデの宗教理論の是非、その理論の西欧中心主義やイデオロギー性の在り方、彼がファシストか否かという議論が盛んに行われてきた。しかし、その理論の形成過程を当時の社会的・文化的状況と重ね合わせながら考察することによって、エリアーデが固執した人間の宗教性へ

の積極的評価や、宗教学に課した文化的・社会的役割の問題を新たな切り口で示すことが可能となった。

第三章 エリアーデ宗教学における近代批判性

エリアーデ宗教学の目的を、近代批判の試みとして捉える。彼は社会の非聖化とそれにとまなう近代における人間状況に対する不安を、進歩主義・客観主義・科学主義・歴史主義などといった近代的世界観の興隆とに密接に結びつけ、そのアンチテーゼとして人間の宗教性に信頼を置いているととらえられる。それゆえ彼の宗教学は、客観性や実証性という自然科学の原理では取りこぼすような文化的役割を、非聖化された西洋近代社会において果たすことを志向することになる。このような視点を有するが故に、彼の宗教学は近代を克服するための「救済の学問」として規定される性格を持つ。このことを *homo religiosus*、「中心のシンボリズム」、「聖なるものの擬装」、「新しいヒューマニズム」などの諸概念の検討から提示する。

とくに「新しいヒューマニズム」は、西洋世界における自己深化としてではなく、西洋からみて他者にあたる「プリミティブ」や「アルカイック」と称される社会における意味世界を理解することによって進行するのである。そこで、他者理解をとおして人間に対する探求を導こうとするこの企ては必然的に人間学的な色彩を帯びてくる。すなわち「新しいヒューマニズム」とは、西洋における知的・精神的な偏狭さを脱するための、他者との出会いを契機とする、宗教をとおした新たな意味世界の開示、人間状況の理解というプログラムなのであった。そこで求められるのが、人間の普遍性と統一性を前提とする包括的な学問、哲学的人間学としての宗教学である。

またエリアーデは、人間の統一性を *homo religiosus* という概念によって包括的にあらわしたといえる。また、エリアーデの宗教学の方法論的特徴を決定する「ヒエロファニー」とは、宗教現象を同一平面上で表現するために造出されたカテゴリーであり、その様々な形態のあらわれにエリアーデは人間の実存状況を読み取りうるとしていた。ここにおいて人間は、ヒエロファニーをつうじて自らを世界のうちに位置付ける者として措定されるのである。それはエリアーデにとって時間や空間を越えて人間性を貫いている中心であり、そのため、エリアーデの宗教学はあらゆる人間がその研究対象となる。いわば、人間は人間である限り、おのが実存状況を何らかの方法で位置付けることなしには生きられないとするのである。「聖なるもの」の次元を、その実存状況への様々な関与の媒介とみなす確信から、エリアーデ宗教学は *homo religiosus* を前提とし、むしろそこから発生していくのである。ここに人間と宗教を密接に結びつけ、そこに人間の普遍性をみるエリアーデの姿をみる事が出来る。エリアーデの宗教学が志向したのは、人間の生の意味を探究し、その読者（特に西洋世界の）をある意味で救済することとなる。生涯にわたり広範におこなわれた「聖なるもの」の探求も、このような問題意識に帰することができらう。

また、エリアーデは同郷の彫刻家ブランクーシの作品を「聖なるものの擬装」として、かつて「聖なるもの」が果たしていた役割・機能を見出した。解釈行為によってそれを明らかにすることが、エリアーデにとっての宗教学の重要な役割である。現代芸術に聖なるものを見出そうという試みは、このエリアーデの場合においては、その是非はともかく、世俗化の進んだ現代世界において隠蔽されたとみなされた「聖なるもの」を引き戻し、人々に示すための具体例であった。とするならば、そういった試み自体の必要性がつねに問われなければなるまい。換言すれば、「宗教」と峻別される「芸術作品」に対して、そこに研究者が「宗教」や「聖なるもの」を見出すことの意味に自覚的になる必要があるはずである。と同時にこのようにルーマニアとエリアーデの関係を通じて、あるいはルーマニア時代のエリアーデを考察することは、一人の学者としてのエリアーデ像を再考することに繋がる。

エリアーデの宗教学が志向したのは、人間の生の意味を探究し、その読者、特に想定される西洋の知識人を、ある意味で救済することである。エリアーデにとって宗教学の目的は、ただ単に事実を記述し、データを並べ立てることにはない。彼の理論は、時に大胆過ぎるとも言え、問題が指摘される。しかしそこには、彼の生きた近代における人間状況への不満と、それを乗り越えるための宗教学の役割、という視点が常に存在している。彼が見据えていたのは、宗教学を、宗教思想としてキリスト教に代替させることではない。いわば、理想的・理念的な社会的宗教を追求する道ではない。むしろ近現代を含め、あらゆる時代、あらゆる地域におけるヒエロファニーのありかたを明らかにすることによって、人間の可能性を開く道としてとらえていたということは強調して確認しておきたい。人間に対する新たな可能性の提示こそが、エリアーデが「新しいヒューマニズム」と標榜する意図なのだといえよう。ここには、社会の非聖化と自然科学的世界観の興隆との密接な関係へのアンチテーゼの意味も含まれているはずである。

第四章 《近代》の克服としてのエリアーデ宗教学

以上を踏まえた上でエリアーデ宗教学と現在の宗教学者との関係を考察する必要がある。それにはエリアーデが宗教学に負わせた文化的役割の意義と必要性が、現在の研究においていかなる位相にあるのかを自覚的に再定位しなければならないだろう。彼の準拠枠を把握し、現在の我々との関係において問い直すとき、近代批判はどのように位置づけられるのだろうか。あるいは近代批判としての宗教学の営みの当否は常に問い続けなければならないだろう。

エリアーデは東欧という西洋における地理的な辺境において学問を醸成し、またその本格的な活躍は第二次大戦後のことである。そのような状況を鑑みて、エリアーデにおける近代への眼差しがいかなるものであったのかを確認しなければなるまい。すなわち近代とどのように相対し、どのように問題化し、どのように克服しようとしたのかということを明らかにしなければならない。

とはいえ、エリアーデの近代への眼差しといっても、生涯一貫しているわけではない。少なくとも彼が対面していた近代そのものが、ルーマニア時代と亡命以降とは大きく異なっているはずである。彼自身の捉え方と同時に批判の対象そのものも当然、シフトしていかざるべきである。そもそもルーマニア時代は、世界全体が第一次大戦後から二次大戦へと向かう激動期であり、またエリアーデが属していた文化的・社会的な状況も、ルーマニア的な文脈が非常に強い時期である。亡命後は、戦後かつ故郷から切り離された亡命者という身分であり、フランス（1945-56）→アメリカ（1956-86）へと活動の場を移していることにも示されるように基本的にその立場はコスモポリタンの性格のものとなる。

おわりに

宗教現象を「聖なるもの」として近代の外部に範を求め、近代的な状況に貪欲に取り込む回路を有しているエリアーデの宗教学は、それゆえにインスピレーションの泉として芸術家・文学者に好まれてきた（日本人だけでも 岡本太郎、イサム・ノグチ、渋澤龍彦、大江健三郎 etc…）。あるいは60～70年代のニューエイジ・ムーブメントにおける理論的な支柱として利用されるなど、その役割を果たしたのだった。

最後に資料として、本邦においてほとんど紹介されていないエリアーデによるルーマニア語著作リスト（他言語からの翻訳を除く）を附した。出版年順に並べ、死後編集されたものも掲載した。日本では非常にアクセスすることの難しい資料群でありながらも、今後より重要度が増してゆくはずである。

論文審査結果の要旨

本論文は、20世紀の宗教学の学問的枠組みの形成に強い影響力をもったルーマニア生まれのミルチャ・エリアーデを研究対象として取り上げ、彼自身の宗教学の形成の足跡を丹念に辿ると共に、彼に対する批判を鏡としながらエリアーデ宗教学の意義を明らかにすることを目指している。この論文は、「はじめに」の後に四章を配し、「おわりに」で総括される構成をとる。

「はじめに」において本論文の方向性が述べられた後、第一章「宗教学におけるエリアーデ受容および批判」では、特に日本におけるエリアーデ受容に留意しながら、彼の学説がもたらした影響力が論じられる。とりわけ、従来批判されてきたエリアーデ宗教学の非実証的な論証手続きの裏にこそ、エリアーデの希求した問題が潜んでいることが指摘され、本論文の視座としての人物研究の意義が述べられる。これに続く第二章「エリアーデにおけるルーマニア」では、エリアーデ宗教学が近代に対する批判的な視点をもつようになった契機として、亡命前のエリアーデがルーマニアにおいて民族主義的な思想潮流に身を置いていたことが論証され、亡命後をも含めた点からエリアーデにとっての祖国ルーマニアが明らかにされる。次の第三章「エリアーデ宗教学における近代性批判」では、彼の宗教学を近代批判のこころみとして捉える視点から、「homo religiosus」「中心のシンボリズム」「聖なるものの擬装」「新しいヒューマニズム」といったエリアーデの鍵概念が再考されるが、ここでもルーマニア時代のエリアーデが鏡となって論じられる。その結果エリアーデ宗教学には、近代における人間状況への不満と、それを克服するための宗教学の役割が常に意識されていることが指摘される。このような議論に立ち、第四章「《近代》の克服としてのエリアーデ宗教学」では、現在の宗教学におけるエリアーデ宗教学の位置が検討され、その今日的意義が明らかにされる。そして「おわりに」では、この論文の視座が再確認され、今後の課題が提示される。

本論文は、これまで多くの研究者により論じし尽くされてきたと理解されていたエリアーデ宗教学を、コトバの壁で看過される傾向の高かったルーマニア時代の文献を読み込むことで再考した点が高く評価できる。最後に添付されたエリアーデのルーマニア語著作目録は日本では初めてで、それぞれにコメントが付けられている点も貴重である。説得力を持った論述のためには、さらなる工夫の余地は残されているが、ここでの成果が斯学の発展に寄与することは間違いがない。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと判断される。